医療最前線

>>>vol.91

川崎医科大学附属病院
脳神経内科

Report!

適正な検査と正しい診断で、患者の暮らしに寄り添った治療を

ていねいな問診と高水準の検査で多岐にわたる神経疾患を診断。

脳神経内科は、脳や神経、筋肉などの病気に対して内科的治療を行なう診療科。頭痛やめまい、手足のしびれなど日常の中で比較的よくある症状から、歩きにくい、しゃべりにくい、痙攣、意識障害といった重篤な症状までを診療している。

「症状の種類はあまり多くありません。しかし、原因として考えられる疾患は、慢性頭痛やてんかんなど比較的頻度の高い病気から、アルツハイマー病やパーキンソン病といった神経変性疾患、筋ジストロフィーをはじめとする神経難病まで、多岐にわたります」。そう話すのは同科を率いる三原雅史教授。受診患者の中には、MRIやCTなどによる画像検査で異常が認められず、原因がわからないという人も多い。そうしたケースで力を発揮するのが、神経や筋肉に電気を通して反応を見る電気生理学検査。

「電気を用いる検査を正しく実施し、結果を的確に分析・解釈するには多くの経験が必要です。スキルの高いスタッフが揃う当科の検査は、国内でも高い水準にあると思っています」と三原教授。いっぽうで、「脳神経内科の領域では、問診でしっかりと話を聞き、きちんと触診するという手法を重視しなくては、正しい診断にたどり着けないことも多い」とも。

三原教授が長年取り組んできたのが、高齢者に多いパーキンソン病。「慢性頭痛やてんかんは、薬をきちんと飲んでもらえば症状が悪くなることは少ない。しかし、パーキンソン病は早期の診断や投薬治療に加えて、よい状態を長くキープするための生活指導が不可欠」。そのため、患者本人のみならず身近な人にも生活の中での病気との向き合い方を伝えているという。

この三月には、認知症の原因の約七割を占める(※1)アルツハイマー病治療薬として昨年承認されたレカネマブの投薬も始めた。「従来、アルツハイマー病は進行を止める治療が難しく、一時的に症状を抑えることしかできませんでした。しかし、レカネマブは脳の神経細胞が壊れる原因となる物質を取り除くことで、進行を抑制する効果が期待される薬です。当院では診断、検査、治療適応への検討から投薬、治療後の対応まで行なえる体制が整っています」。早い段階でしか使えず、一部副作用も報告されているが、その効果に期待を寄せる人は多い。「患者さんに早く治療を始めたら長い期間メリットを得られるというメッセージが届き、受診のきっかけになれば」。そう願う三原教授は、患者の価値観や環境、暮らしぶりなどを踏まえつつ、多職種と連携して、日々の診療にあたっている。

お問合せ
川崎医科大学附属病院
倉敷市松島577
☎086-462-1111
https://h.kawasaki-m.ac.jp

Neurology

脳神経内科の医師たちが入院患者の診断や治療方針について意見を交わすカンファレンスのほか、多職種カンファレンスも行なっている。薬による治療以外に、介護や福祉によるケアを充実させるためにもしっかりとした連携が必要。

「どんな症状があって、どういうふうに悪かったということを明らかにするだけで病気がわかることもある」ため、診察時にはしっかりと話を聞いている。

患者さんが必要としていることや重視しているポイントを考え合わせて、診断・治療することが重要だと考えています。休日の愉しみは、ふらっと温泉にいくこと。7年前に大阪から来たのですが、岡山には温泉がたくさんあるので重宝しています。

三原 雅史 教授
Mihara Masahito

■ 専門医
日本内科学会総合内科専門医、
日本神経学会神経内科専門医、
日本リハビリテーション医学会リハビリテーション科専門医

回診は週2回。新しく入院した患者一人ひとりをしっかりと診る日と、それぞれのポイントを定めてすべての入院患者を診る日にわけている。

※写真は取材用に撮影したものです　※1：出典元／厚生労働省「2019年認知症施作の総合的な推進について」